

# 中東欧諸国の日本語教育機関の利用に供する 教育用コンテンツの開発

国立教育政策研究所 坂谷内 勝

## 1. はじめに

今からちょうど 20 年前の 1988 年（6 月 23～24 日）、「第 1 回東欧日本語教育連絡会議」がユーゴスラビア・クロアチア共和国・ドゥブロヴニク（図 1）で開催された。参加者は 6 名（内 2 名はレジュメによる参加）で、議事内容は当時の東欧各国の状況と大学の待遇や環境についてであった。この会議報告は、『第 4 回日本語教育連絡会議総合報告書－東欧圏の「民主化」と日本語教育－』（1991 年 12 月）に掲載されており、「民主化」以前の東欧の日本語教育について知ることのできる貴重な資料である。日本語教育連絡会議は毎年 1 回、東欧またはその周辺国で開催され、第 4 回以降は会議終了後に報告書（または論文集）が刊行されてきた。報告書（または論文集）の合計冊数は、昨年（2007 年）の第 20 回で 17 冊目になる。



図 1 ドゥブロヴニク

【Wikipedia の「世界遺産」地図より引用】

## 2. 総合報告書から論文集へ

第 4 回から第 20 回までの報告書（または論文集）のタイトルを以下に列記する。

- ・『第 4 回日本語教育連絡会議総合報告書－東欧圏の「民主化」と日本語教育－』, 1991 年 12 月.  
（注：この報告書には、第 1 回から第 3 回までの会議報告が収録されている。）
- ・『第 5 回日本語教育連絡会議総合報告書』, 1992 年 12 月.
- ・『第 6 回日本語教育連絡会議総合報告書』, 1993 年 12 月.
- ・『第 7 回日本語教育連絡会議報告発表論文集』, 1994 年 12 月.
- ・『第 8 回日本語教育連絡会議報告発表論文集』, 1995 年 12 月.
- ・『第 9 回日本語教育連絡会議報告発表論文集』, 1996 年 12 月.
- ・『第 10 回日本語教育連絡会議総合報告書』, 1998 年 3 月.
- ・『第 11 回日本語教育連絡会議発表論文集』, 1998 年 12 月.
- ・『第 12 回日本語教育連絡会議発表論文集』, 2001 年 4 月.
- ・『第 13 回日本語教育連絡会議報告発表論文集』, 2001 年 2 月.
- ・『第 14 回日本語教育連絡会議報告発表論文集』, 2002 年 3 月.
- ・『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 15』, 2003 年 3 月.  
Papers Presented at the 15th International Conference on Japanese Language Teaching
- ・『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 16』, 2004 年 3 月.  
Papers Presented at the 16th International Conference on Japanese Language Teaching
- ・『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 17』, 2005 年 3 月.  
Papers Presented at the 17th International Conference on Japanese Language Teaching
- ・『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 18』, 2006 年 3 月.  
Papers Presented at the 18th International Conference on Japanese Language Teaching
- ・『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 19』, 2007 年 5 月.  
Papers Presented at the 19th International Conference on Japanese Language Teaching
- ・『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 20』, 2008 年 3 月.  
Papers Presented at the 20th International Conference on Japanese Language Teaching

初期の第4～6回と第10回は「総合報告書」というタイトルで、機関報告と発表論文が掲載されている。続いて第7～9回、第11～14回は「発表論文集」で、発表論文のウエイトが大きくなっている。そして、第15回以降は「論文集」となり、ISSN番号を取得し、英文タイトルも統一されるなど、いわゆる学術雑誌の形体となっている。

### 3. 収録件数について

17冊の報告書・論文集の収録内容の件数は、各会議開催別に集計すると、表1のようになる。そして、収録内容を「東欧」（東欧に関する内容）と「一般」（「東欧」以外の内容）に分類して折れ線グラフにすると、図2のようになる。

表1 各会議別の収録件数

第N回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	合計
件数	1	1	1	20	20	32	35	54	53	39	50	34	33	40	29	19	25	22	23	25	556

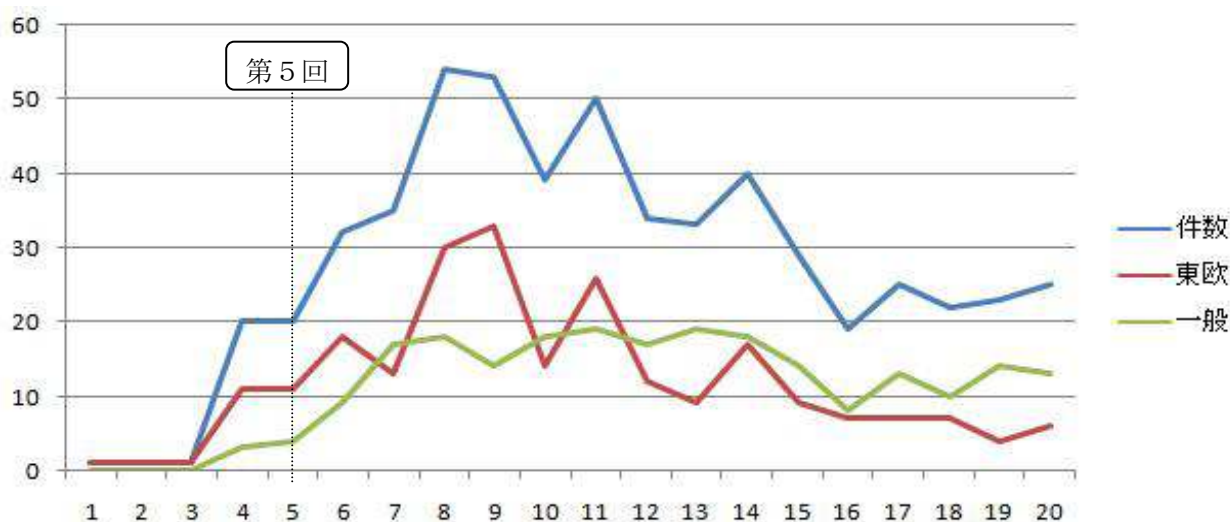


図2 収録内容別件数の推移

例えば、第5回の報告書では、収録件数の合計は20件、その内「東欧」に関する内容は11件、「一般」に関するものは4件、そして残り5件は表紙、まえがき、目次、会議報告、奥付（これらも各1件とした）である。

収録件数は、第8回が最も多く、第17回以降は25件程度となっている。当初「東欧」に関する内容が多かったが、後半は少なくなってきた。

### 4. 収録内容について

先に、収録内容を「東欧」と「一般」に分類したが、「東欧」に属する内容について説明する。明らかに「東欧」に関するものとして、東欧（日本以外）の機関報告、東欧の教師／学習者に関する論文（発表・報告）、東欧の言語に関する論文（発表・報告）がある。

日本以外の国、例えば、ドイツ、イタリア、イギリス、エジプト、オーストラリア等も「東欧」に分類した。正確には、「東欧」とは「日本以外」の国であるが、会議の目的を踏まえて、あえて「東欧」と呼ぶことにする。国別収録件数を図3に示す。

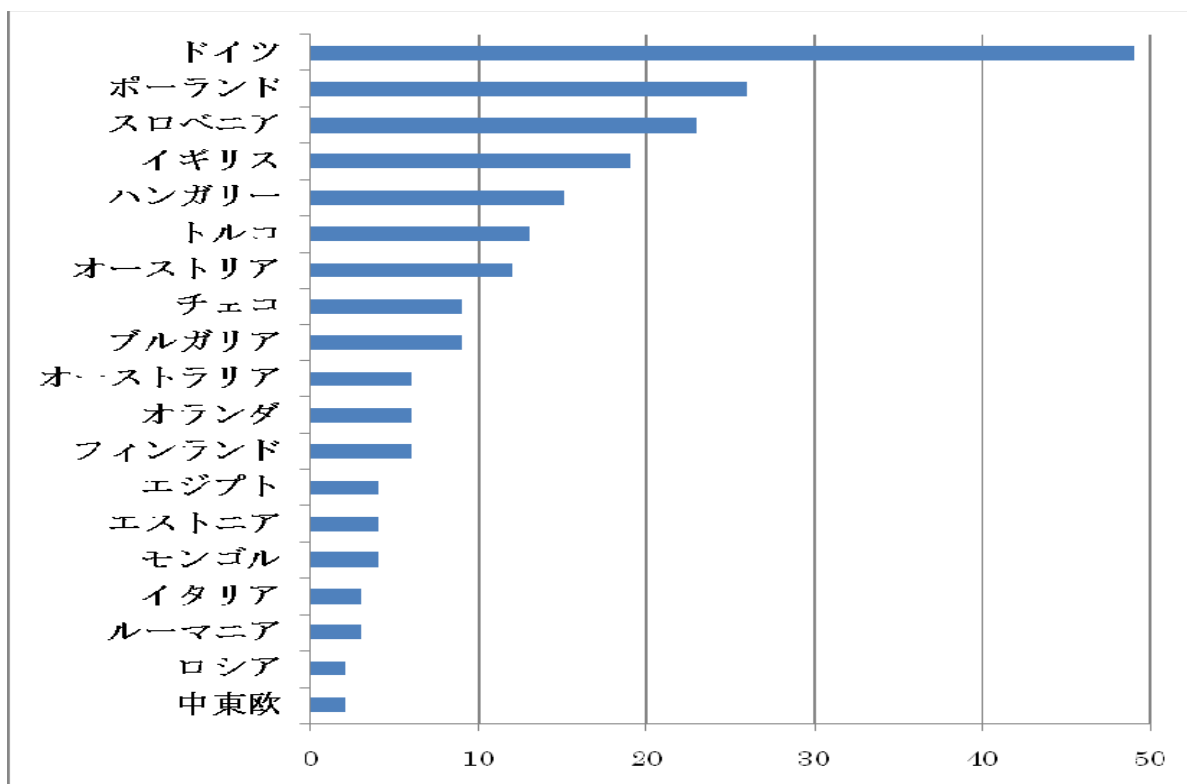


図3 国別収録件数（2件以上）

例えば、スロベニア（スロヴェニア）に分類した収録内容として、次の報告や研究発表がある。

【機関報告の例】

- ・スロヴェニア共和国における日本語教育－1990～91年の報告と現状
- ・スロヴェニア東方学会日本語講座機関報告 1993／1994
- ・リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科日本研究講座
- ・リュブリャーナ大学における日本語教育実習プログラム
- ・リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科日本研究講座 2003／2004年度機関報告
- ・リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科日本研究講座 2004／2005年度機関報告
- ・リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科日本研究講座 2005／2006年度機関報告
- ・外国人のためのスロヴェニア語セミナーに参加して

【研究発表の例】

- ・日本語とスロヴェニア語における再帰行為表現の対照
- ・日本人は悩んでいます－スロヴェニア人が回答する人生相談
- ・日本語とスロヴェニア語の基礎動詞 - ヴォイスの観点からの対照 -
- ・スロヴェニア人日本語学習者用のXML化
- ・リュブリャーナ大学日本学専攻における学生の統計的分析
- ・教師は日本語教育実習で何を評価するのか－リュブリャーナ大学を例に－

5. 著者について

著者について調べると、延べ人数は546名、重複を除く著者は191名であった。言うまでもなく、報告書・論文集に執筆せずに日本語連絡会議に出席している参加者がいるので、会議参加者

総数はさらに多い。

著者別ランキング（日本語連絡会議の重鎮、敬称略）は、1位（14回）重盛千香子、2位（12回）土屋千尋、3位（10回）土屋順一、4位（9回）隈本ヒーリー順子、同じく4位（9回）アンドレイ・ベケシュであった。このランキングは、これまで20回（17冊）の会議報告書・論文集の中で何回出現しているかを調べたものである。1冊の中に複数回出現していても1回と数えた。これに対して、重複を許す出現著者名の合計数ランキング（上位8名、敬称略）は、図4に示すとおりで、先の著者別ランキング5名のほかに、若井誠二、マデルドナーめぐみ、吉村弓子の3名の著者が加わる。

著者名	合計	回数
重盛千香子	26	14
若井誠二	16	6
土屋千尋	15	12
隈本ヒーリー順子	15	9
アンドレイ・ベケシュ	14	9
マデルドナーめぐみ	13	8
吉村弓子	12	5
土屋順一	11	10

図4 合計出現数の多い著者

著者名を調べるにあたり、表記の不統一に関する問題が生じた。例えば、合計数14回の「アンドレイ・ベケシュ」については、次のように表記されている。（ ）内の数字は出現回数である。

- ・Andrej Bekes（1）
- ・アンドレイ・ベケッシュ（1）
- ・アンドレイベケシュ（1）
- ・ベケシュ・アンドレイ（3）
- ・アンドレイ・ベケシュ（8）

マデルドナーめぐみ（7）とマダドナーめぐみ（4）、川手ミェジェイフスカ恩（1）、川手ーミヤジェエフスカ恩（1）、川手ーミヤジェイェフスカ恩（2）、川手ミヤジェイェフスカ恩（3）のように、同一著者をどのように統一して表記するかという問題がある。その他の問題として、木村静子と木村静子のような異体字の問題（斎藤、斎藤、齊藤、齋藤・・・のような異体字は日常的によく見かける）、同姓同名の問題、さらにワープロ入力ミスの問題もある。

## 6. おわりに

本稿で報告した日本語教育連絡会議報告書・論文集のすべての収録内容は国立教育政策研究所で電子化し、日本語教育連絡会議のホームページ (<http://renrakukaigi.kenkenpa.net/>) で公開する予定である。収録内容は、各会議別の目次インデックスの他に、「東欧」に関する国別インデックス、著者別インデックスを開発し、利用者の便に供したいと考えている。

最後に、日本語教育連絡会議のすべての冊子をお送りいただいた、事務局の土屋千尋先生に深く感謝いたします。土屋千尋先生は、この会議発足以来、毎年、会議報告書・論文集の作成に携わり、その多くをボランティアで行って来たと聞いております。一方、土屋順一先生は、土屋千尋先生の良きアドバイザーとしてこの会議を盛り上げてこられました。土屋夫妻の御努力と御苦労に対して重ねて感謝いたします。

本研究は、科研費・基盤研究(B)「中東欧諸国の日本語教育機関における教育用コンテンツの実態調査と共同開発」(No. 18401015) の助成を得た。